平成２８年度
函館市学習状況調査実施報告書

～最後までやり切る指導の一層の充実を目指して～

函館市教育委員会
函館市学力向上プロジェクト推進委員会

刊　行　に　寄　せ　て

進化した人工知能が様々な判断を行ったり，身近な物の働きがインターネット経由で最適化されたりする時代の到来が，社会や生活を大きく変えていくとの予測がなされ，第４次産業革命といわれております。「人工知能の急速な進化が，人間の職業を奪うのではないか」「今学校で教えていることは時代が変化したら通用しなくなるのではないか」といった不安の声もあり，それを裏付けるような未来予測も多く発表されているところです。

中教審答申では，これからの時代に求められる資質・能力を身に付け，生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするため，子どもたちが「どのように学ぶか」という学びの質を重視した改善を図っていくことが大切であるということが示されました。学びの質を高めていくためには，「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）の実現が必要であり，日々の授業改善を行うことが重要であります。

特に，次期学習指導要領では，学習内容と方法の両方を重視し，子どもたちの学びの過程を質的に高めていくことを目指しており，単元や題材のまとまりの中で，子どもたちが「何ができるようになるか」を明確にしながら，「何を学ぶか」という学習内容と，「どのように学ぶか」という学びの過程を，「カリキュラム・マネジメント」を通じて組み立てて行くことが重要になります。

こうした中，教育委員会では，今年度から「アクティブ・ラーニング推進事業」を実施し，外部講師を招聘するなど，学力向上に向けた授業改善の推進に努めているところであります。

本報告書でも，各学校の校内研究の充実を目指し，特集として掲載しております。

各学校におきましては，本報告書を活用し，子どもたちの学力向上に向けた教育活動が積極的に推進されますよう期待しております。

本報告書の刊行に当たって，校長会および教頭会をはじめ，市内各小・中学校並びに「函館市学力向上プロジェクト推進委員会」の皆様には，多大なご協力をいただいたことに対しまして，心からお礼申し上げます。

平成２９年３月

函館市教育委員会
教育長　　山　本　真　也

探究型の授業（アクティブ・ラーニング）を充実させるために

今年度は，アクティブ・ラーニング推進事業で，４名の外部講師を招聘しました。外部講師の助言をまとめましたので，授業づくりの参考にしてください。

明星大学客員教授　細水　保宏　氏より

～算数・数学編～

「ハラハラ」「わくわく」「ドキドキ」するような授業をつくろう!

「先生→子ども→子ども→子ども」とつながる授業を目指そう!

★　アクティブ・ラーニングでは，子どもの思考が止まらないようにすることが大切です。
　先生方の思考がアクティブならば，子どもたちもアクティブになります。

★　答えが出た時，先生が「いいですか？」と聞いたら，子どもからは「いいです」としか返ってきません。でも，「えっ！？」「本当に？」「絶対？」と言われると，むしろ思考は活発になり，子どもから「だって･･･。」を引き出すことになります。

★　教えるのではなく，子どもの考えを引き出すことが大切です。

子どもが一旦立ち止まって考える場面を作ることは，
将来身に付けさせたい主体性につながります。

★　一生懸命やっていれば，アクティブということではない。思考をしているかどうかです。

★　手法がアクティブではなく（活動あって学び無し），脳をアクティブにしましょう。

先生が困るぐらい，先生を超える子を育てましょう!

★　義務教育の出口は中学３年生であり，そのためには，「今何をしたらよいのか。」望ましい子ども像を発達の段階を踏まえて設定するとともに，教員間で共有することが大切です。

指導方法よりも教科の本質が大切です!

★　算数・数学の時間に，子ども自ら「図をかく」，「表をかく」という子どもに育てたいのなら，教師が「〇〇しなさい」と言うのではなく，〇〇している子どもを褒め，価値付けることが大切です。

【研究全般について】

・研究を推進する上では，仮説が必要であり，その仮説に基づいて研究を進めましょう。
・研究授業でわかってきたことは，子どもの姿をもとに成果や課題を把握しましょう。
・研究授業は，チャレンジしたものを公開することで，研究の妥当性や方向性が決まりますから，完璧な授業でなくても構いません。
・研究をして，うまくいかないとわかることも研究です。
　例）学び合いの研究をしたが，この学び合いではダメだとわかることも研究の一つです。

～算数・数学編～

明星大学客員教授　細水　保宏　氏より

【１単位時間の授業の中で】

手をかけるのではなく，目をかけよう!

め

子どもにとって必要感がある学習問題であれば，子どもたちが主体的になります。

よ

個人で考えさせる時間を大切にしましょう。

意思表明（「できる」「できない」「わかる」「わからない」等）をさせましょう。

早めに答えを確認し，「答えが〇〇になるけど，どうして？」と逆説的に考えさせたり，ペア交流などをしながら自力解決させたりする場面を設定しましょう。

た

学び合いは，新しい考えが生み出されることです。

学び合いとは，学び合いをしたことで子どもたちに変容が見られることです。

交流で学びを深めることを意識させる。どんな時でも話ができる学級の支持的風土が大切です。

小交流（グループ交流等）の間も，教師はしっかりと指導することが大切です。

誤答を生かし，なぜそうなったのかをクラス全体で考えます。

教師は，意図的に指名することが大切です。特に，その学習が苦手な子どもを指名することで，その子どもの思考がアクティブになります。

判断を子どもたちにさせましょう。

ま

深い学びのために，定着問題または適用問題を解かせましょう。

その時間の評価規準に則り，ドリルを行う時間（場面）を精選することが必要です。

【授業全体】

今日誰がわかって，誰がわからないのかを教師は知ることが大切です。

- 子どもの良いところを褒めましょう。褒めるということは，そういう姿になってほしいという教師の願いです。
- 学び合いは，相手を意識すると活性化します。子どもの学び合いの力をいかに育てるかが大切です。
- 様々な教科の中で，道徳教育の視点をもちましょう。

東京学芸大学教授　粕谷　恭子氏より

～外国語活動・英語科編～

「インプット」あってこその「アウトプット」になります！

言葉に命を吹き込みましょう！

★　言葉に意味をもたせ，子どもが思っていることを話すコミュニケーションを図る活動をしましょう！

★　営みの中で，意味と音を結び付かせましょう。（赤ちゃんも日本語の習得の時に同じだったはず）

★　意味の無い「good」や不必要な「excellent」はいりません。

単語で覚えさせるのではなく，フルセンテンスでたくさん聞かせましょう！

フルセンテンスを聞かせるとき，単語や前置詞で区切りません！

（例）I　get　up　at　6 o'clock.

部品で考えるから，前置詞がおちます。音で覚えさせましょう。

一人ずつ話せるか確認する場の設定をしましょう！

【外国語活動でよく見られる課題】

●　外国語活動では，よくビンゴゲームやフルーツバスケットゲームを活用したアクティビティーが見られます。このゲームのポイントは，勝敗で終わりにしないことです。誰が１番ビンゴが多いとか，フルーツバスケットで何回鬼になったとか。ゲームを楽しむことが目的ではありません。外国語活動は，英語でコミュニケーションを図る活動です。

【授業のチェック項目】

☐　**「音だけの抜け殻」ではなく，「意味をもった言語」でしたか？**

☐　**英語に慣れ親しむという質を維持していましたか？**

☐　**子どもたちに発語があった場合，その前に十分インプットさせましたか？**

☐　**子どもが英語を類推する場面がありましたか？思考させていましたか？**

☐　**無駄な教材は無かったですか？**

☐　**ゲーム「だけ」が楽しい授業になっていませんでしたか？**

☐　**コミュニケーションのとらえ方が狭すぎませんでしたか？**

秋田公立美術大学教授　毛内　嘉威氏より

道徳科だけでは，
考え，議論する道徳をすることはできません。
全教育活動で意識して考え，議論させましょう!

質の高い授業への転換!

考え，議論する道徳≠ディスカッション

重要！

（授業の構想では）価値理解と同時に
人間理解や他者理解を深めていく展開にしましょう!

◎　価値理解：人間としてよりよく生きる上で大切な内容項目を理解させること
登場人物が道徳的価値の意義やよさを実感したときの考えや思いを発問すること

◎　人間理解：道徳的価値は大切であっても実現することができない人間の弱さなどを理解させること
登場人物が道徳的価値の意義やよさをわかりながらも受け入れられない考えや思いを発問したり，実現できなかったときの思いを発問したりすること

◎　他者理解：登場人物の悩みや迷いを想像することで多様な感じ方，考え方が表れ，他者理解が深まること
登場人物が道徳的価値の意義やよさ，実現することの難しさを総合的に考察する発問をすること

子どもの体験に基づいて，
多面的・多角的な視点から考えを引き出しましょう!

登場人物の気持ちを考える時，
役割演技も有効な手段です。

【評価について】

○　子どもの学習の過程や成果などの記録を計画的にファイル等に累積して学習状況を把握することが考えられる。

○　記録したファイル等を活用して，子どもや保護者等に対し，その成長の過程や到達点，今後の課題等を記して伝えることが考えられる。

○　教員同士で互いに授業を交換して見合うなど，チームとして取り組むことにより，子ども理解が深まり，変容を確実につかむことができるようになる。

筑波大学附属小学校教諭　佐々木　昭広氏より

～理科編～

本時の学習目標を達成できることが一番の目的です！

★　子どもの生活経験は様々です。理・数教科は，系統立てた単元なので，自力解決が可能です。

★　目的意識をもった実験にしましょう。

★　自分の立場を明確にさせましょう。

【学習目標達成に向けて】

★　問題解決的な学習を行いましょう。

★　子どもの考えを外化（言語化・図表化・ジェスチャー化）させる場面を設定しましょう。

→主体的な学習活動を行うことができます。

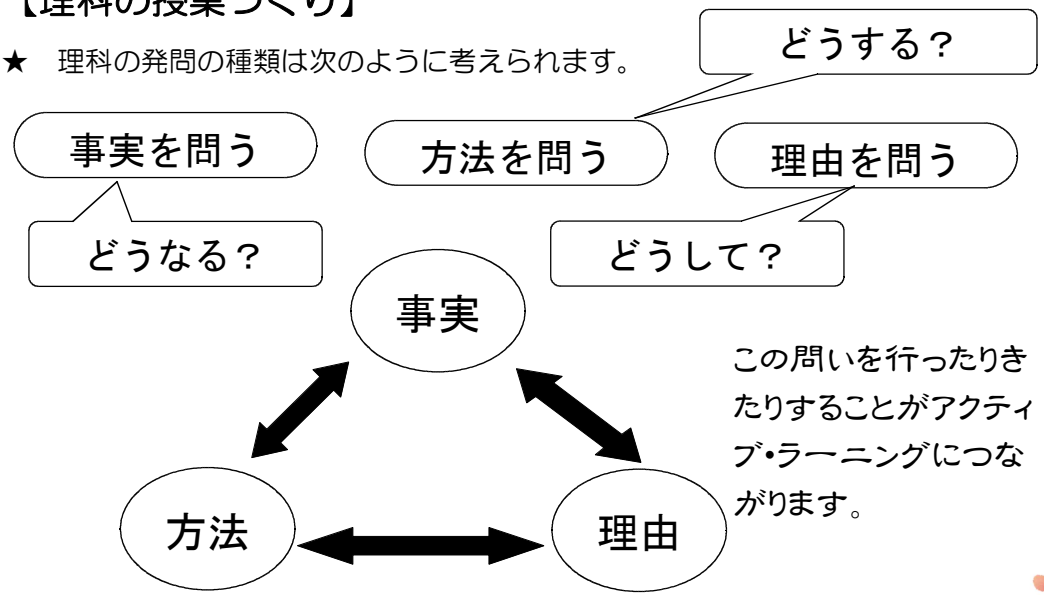
【問題解決的な学習のバリエーション】

①　ミステリー型（演繹的な思考がベース）：犯人（結果）が分かっており，なぜそうなったのか理由を考える場合

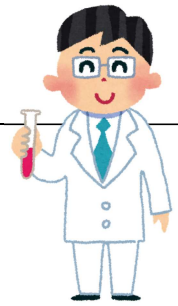
②　サスペンス型（帰納的な思考がベース）：様々な事象が起こり犯人（結果）が分かる場合

【理科の授業づくり】

★　理科の発問の種類は次のように考えられます。



この問いを行ったりきたりすることがアクティブ・ラーニングにつながります。



理科は適用問題より活用問題を大切にしましょう。

校内研究の質の向上に向けて

学習指導要領の改訂に伴い，授業改善が喫緊の課題ですが，そのためには，校内研究の充実が不可欠であり，質の向上に向けて，全教職員が一丸となって取り組むことが重要です。

Ⅰ　校内研究について

現行の学習指導要領については，各教科等において「教員が何を教えるか」という観点を中心に組み立てられております。そのことが，教科等の系統的な指導改善や，指導の目的を「何を知っているか」にとどまらず「何ができるようになるか」にまで発展させることを妨げているのではないかとの指摘もあります。これからの教育課程やその基準となる学習指導要領等では，学校教育を通じて育む「生きる力」とは何かを資質・能力として明確にし，教科等を学ぶ意義を大切にしつつ教科等横断的な視点で育んでいくこと，社会とのつながりや学校の特色づくり，子どもたち一人ひとりの豊かな学びの実現に向けた教育改善の軸としての役割等が期待されています。

そこで，子どもたちが身に付けるべき資質・能力や，学ぶべき内容などを教科等や学校段階を越えて共有することが必要になります。

課題

- ▲　子どもに身に付けさせるべき教科内容（目標・ねらい）を十分意識しないまま交流（学び合い）をさせている授業
- ▲　教材研究が不十分なままの授業
- ▲　子どものつまずきを十分に予測できていない授業
- ▲　一部の子どもと教師だけで進行されている授業
- ▲　ワークシート依存の授業

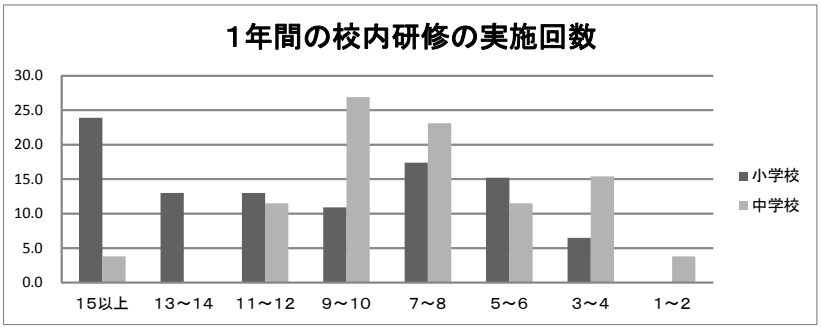
一人では難しい！

改善するために　共同研究が必要です！

校内研究のＰＤＣＡ

P ⇨ **D** ⇨ **C** ⇨ **A**

事前研究	授業研究	事後研究	日々の授業
「教科の壁」を超えた豊かな事前研究	成果と課題の改善を生かした授業	多様な観点からの授業改善が可能	成果と課題の改善を生かした授業



（平成28年度　全国学力・学習状況調査　学校質問紙より）

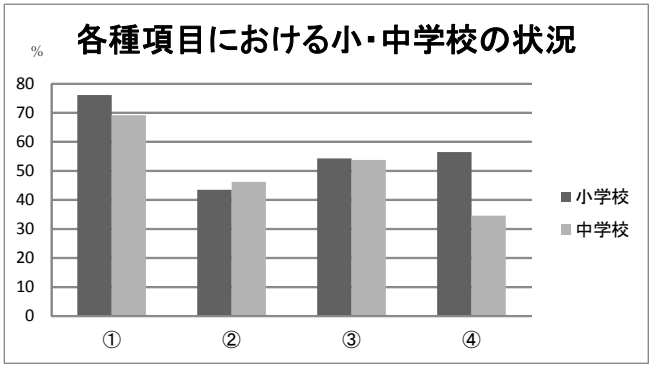
左のグラフは，平成２８年度の函館市の実態です。

校内研修を充実させるためには，教師が主体的に参加できるように配慮することが必要です。

教科の特性を踏まえつつ，特定の教科の課題だけではなく，学校全体の取組として校内研修を進めることが大切です。

Ⅱ　チームで取り組む校内研修

校内研修について「よく行っている」と回答した本市の学校の割合は，小・中学校ともに全国の割合を大きく上回っており，校内研修がしっかりと行われている実態があります。
そこで，以下に示した校内研修に関する質問項目①～④の項目について，「よく行っている」と回答した小・中学校の割合をグラフに表しました。



（平成２８年度全国学力・学習状況調査　学校質問紙より）

〈研修に関する質問項目〉
① 学力の状況や課題について全教職員で共有しているか。
② 研修や研究会の成果を教育活動に反映しているか。
③ 学習指導・評価の計画を教員が協力して作成しているか。
④ 言語活動の実施状況や課題について全教職員で検討しているか。

これらの結果から，成果につながる具体的な取組例を紹介します。

質問項目①	子どもの実態を共有することで，子どもの見取り方や指導の在り方について共通理解が進みます。

〈取組例〉
○ 全教職員で全国学力・学習状況調査を採点し，課題を共有し，研究担当者による提案授業を実施している。
○ 分析結果をできるだけ簡単にまとめ，職員会議や研究部だより等で共有している。

質問項目②	研修や研究会の成果の積極的な交流を行うことで，日常の授業の充実につながります。

〈取組例〉
○ 朝の打合せ時に，一分程度の報告（感想ではなく，特に印象に残った点）をしている。その後，資料等を回覧している。
○ 研修日に研究会の内容を報告している。

質問項目③	学習指導における全校体制での協力や改善を進めることで，授業改善を日常的に行うことができます。

〈取組例〉
○ 若い先生方の授業づくりをミドルリーダーやベテランが支え，自らも積極的に授業公開している。
○ 公開研の準備のために，細かい評価等も学年団，教科団以外でも話し合っている。

質問項目④	学年・教科を超えた共同による授業研究が日常的に行われます。

〈取組例〉
○ 教科ではなく，「話す」「聞く」活動との関連を図った研究はテーマに適している。
○ 「自分の意見をもつ」「他者の考えを聞く」場面を充実させるために，ホワイトボード等のアイテムの活用，交流の工夫等について協議している。

Ⅲ　ワークショップ型の研修について

公開授業後の事後研修において，「全体協議だけでは十分に意見交流ができていない」という声も聞こえてきます。
そこで，協議の場で参加者が本音で十分に語り合えるようにワークショップの手法を導入してみましょう。

全員参加型で誰もが発言でき，質の高い研修会ができます。
授業者だけでなく，参加者も「授業のヒント」が得られます。

【ワークショップ型研修会の基本的な流れ（例）】

	協　議　の　流　れ	形　態	時　間	プロセス
起	●　「説明」 ●　「よさや課題の把握・課題の解決策検討」 （１）付箋を模造紙に貼る。 （２）付箋を仲間分けする。 （３）仲間分けした物に小見出しを付ける。 （４）仲間分けしたグループ同士の関係性を見る。 （５）関係あるものは線で結び，説明を書く。 （６）研究授業での課題を明確にする。 （７）課題の解決策を考え，模造紙に書き込む。	全体 グループ	３５分	共有 発散 混沌 収束
承	●　「グループ活動の発表」 （１）模造紙を提示する。 （２）課題と解決策を中心に各グループから発表する。	全体	１０分	全体共有
転	●　「課題についての自己の振り返り」 （１）自分の課題，改善策を検討，言語化する。 （２）グループ内での分かち合い，感想を交流する。	個人・ グループ	１５分	共有
結	●　「分かち合い，まとめ」 （１）明日の授業でどうしたいかを一言発表する （２）講師助言，講評	全体	１０分	全体共有

（３）　「解決策を練り上げる」などの工夫もできます。

【話し合いのプロセス】

共有 → 発散 → 混沌 → 収束 → 共有

- 共有：話し合いで焦点化したいことを参観者にあらかじめ示します。
- 発散：気付いたこと，感じたことなどをありのまま付箋に書きます。
- 混沌：グループで付箋を貼りながら，気付いたことや感じたことを出し合います。
- 収束：付箋をグループ化します。課題を明確にして解決策を話し合ったりします。
- 共有：短時間でインパクトのある発表が理想です。

（横浜市教育センター　「授業力向上の鍵」より）

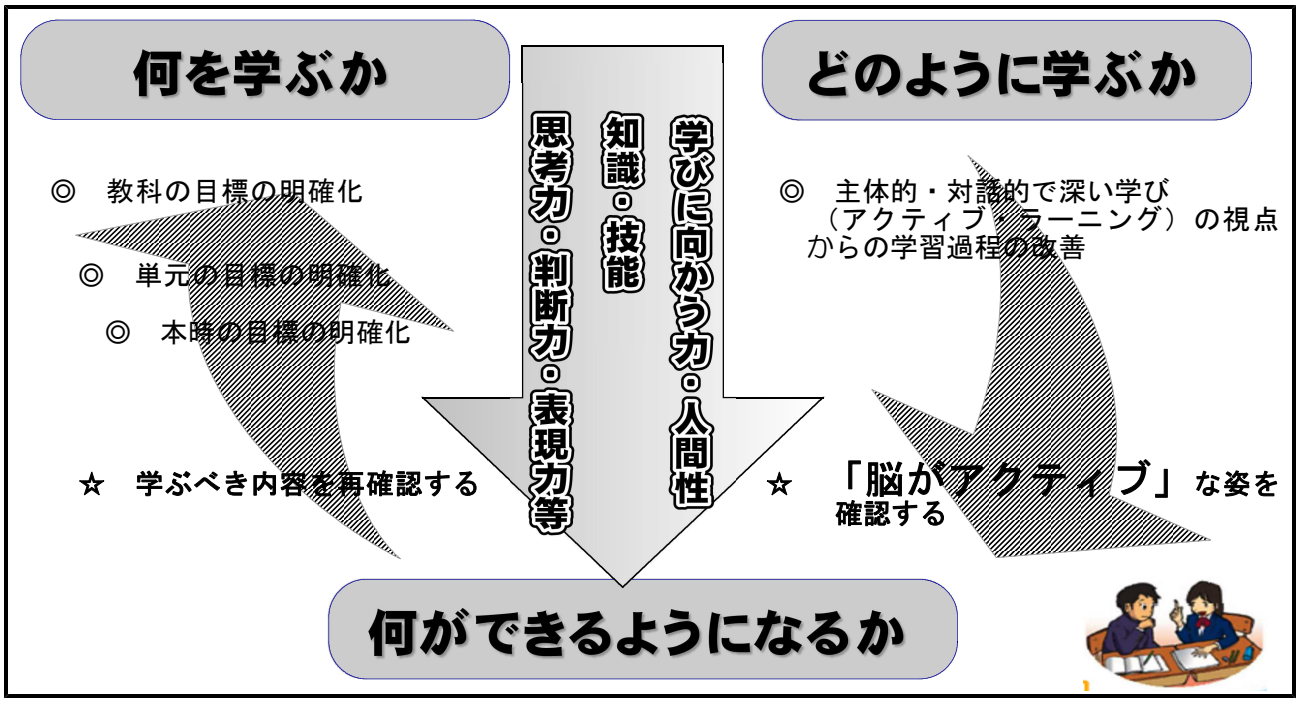
視点を明記したものを配付してから付箋を配付すると，参観者に伝わりやすいです。

付箋に書く内容は「指摘」にとどめ，改善策を協議で話し合うようにしましょう。

発表は話し合いの内容全てではなく，全員に伝えたいことに絞りましょう。
また，焦点化したい内容を中心に「課題への対応」を話し合いましょう。

Ⅳ　校内研究推進（主体的・対話的で深い学びの視点から）

子どもの学びの姿を共有する



◎　次の項目については，全教員で共通理解を図りましょう！

- 子どもの「脳がアクティブ」な姿とは，各学校でどのような姿をイメージするのか，確認しましょう。
- 授業中に，どのような場面で，子どもの「脳がアクティブ」になっている姿が見られたか，有効な場面を確認しましょう。
- 子どもの「脳がアクティブ」になるための学習方法や学習形態について確認しましょう。

授業参観の視点

◎　次の視点で授業を参観しましょう。

- □　評価規準に基づいためあてになっていますか？
- □　目標を実現するための学習活動に取り組ませていますか？
- □　学習課題を解決するために，わかりやすい指示をしていますか？
- □　子どもの発言内容等に対し，共感的な関わりを大切にしていますか？
- □　授業の流れが一目で分かる板書をしていますか？
- □　本時の課題に正対するまとめを行っていますか？
- □　本時の学習内容の定着を図る学習活動や問題を位置付けていますか？

Ⅴ　校内研究推進のために

授業力を向上させる校内研修の例

★　板書計画を活用した指導技術の向上を図るために
　①　研究授業の事前研修として，実際の授業を想定した板書の検証
　　・子どもの思考の流れが構造的に見える板書計画ですか。
　　・板書のスペースは適切ですか。
　　・板書の情報量は適切ですか。
　②　授業研究会
　③　授業研究会で，事前に想定した板書と実際の板書のズレをチェック
　④　日常実践での課題解決

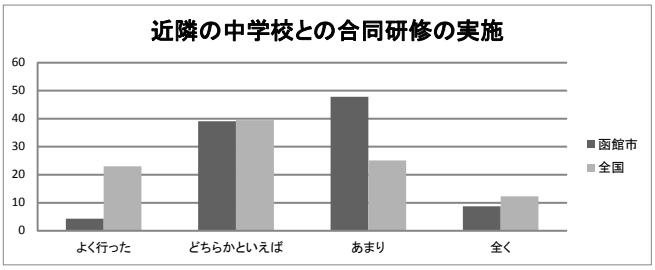
教科，校種を越えた研修会の例

中学校では，教科担任制のため，全校的な共同研究を進めにくい場合があります。あえて教科の壁を越えて，事前研修会→当日のワークショップ型の協議→事後研修会と，チームを作って共同研究を進めることで，より豊かで広がりのある授業改善が可能となります。

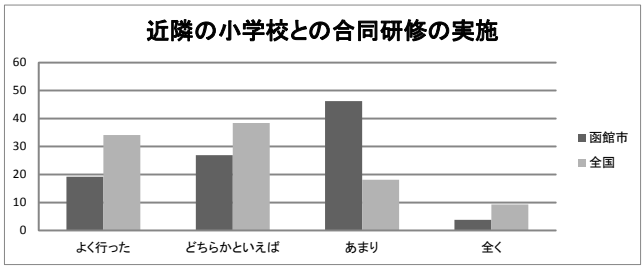
★　教科の壁を越えるための工夫
　①　事前研修会の充実
　　・複数回の事前検討の研修会を実施
　　（１グループ３～４人。対象教科の学習指導要領解説を持ち寄り，教科のねらいや指導内容までを確認する。他教科のねらいや指導内容を知ることは，自分の教科にも活用できる。）
　②　言語活動の共通実践

教科や校種を越えるからこそ見えてくる授業の良さや課題等があるはずです。そのためには，**幼・小連携，小・小連携，中・中連携，小・中連携，中・高連携**が重要です。平成２８年度学力・学習状況調査によると，小・中学校の合同研修は以下の通りとなっております。

【小学校】



【中学校】



【小・中連携の研修会（例）】
　各種調査の結果等から<u>**共通課題を洗い出し**</u>，それを基に中学校区における<u>**共通実践事項を設定する**</u>などして授業改善を進めます。

小・中合同研究チーム
・チーム構成：小・中学校研修担当者５～８名
・小・中合同チームの事前研究会
　①　各種調査等の分析
　②　共通課題の洗い出し
　③　実践事項
　④　授業の実施

事前研修会
小・中合同チームによる事前検討会 ⟷ 小・中全教員による指導案検討

研究の日常化に向けて

「探究型の授業」（アクティブ・ラーニング）を浸透させるために

校内研修を充実させましょう！

授業づくりのポイントについては，「Ｈ２８年度函館市学習状況調査実施報告書」ｐ９をご参照ください。

学びの姿を共有

【目指す子どもの学びの姿は・・・】

○　自校の子どもの実態把握
○　目指す子どもの学びの姿の具体的なイメージの共有（授業中の姿）

授業改善の方策

【目指す子どもの学びの姿を表出させるために・・・】

○　授業を支える深い教材研究
○　目標や評価規準に照らし合わせた授業の構成
○　支持的風土を醸成するような教師のかかわり

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して！

【新しい時代に必要となる資質・能力の育成と，学習評価の充実】

「学びに向かう力・人間性の涵養」
「生きて働く知識・技能の習得」
「思考力・判断力・表現力等の育成」

事前研

◎　多様な視点からじっくり協議しましょう。

・学年の枠を超えて　**縦割りで**

・教科の枠を超えて　**学年で**

・学校の枠を超えて　**異校種で**　（幼稚園・小・中・高等学校）

○　目標が達成されるような授業になっているか？
○　目指す子どもの学びの姿を表出させるための工夫がされているか？
○　子どもの学習意欲が持続する発問か？　など

＊　完成された指導案の検討ではなく，大まかな流れができた段階で話し合いましょう。

公開授業

◎　全教員で確認しましょう。

授業参観の視点については，「Ｈ２７年度函館市学習状況調査実施報告書」ｐ４～１１をご参照ください。

・本時の目標が達成されましたか。
・校内で共通理解された目指す子どもの学びの姿が見られましたか。
・目指す子どもの学びの姿を表出させるための教師のかかわりは適切でしたか。

事後研

◎　次の事前研につなげましょう。

・成果と課題を踏まえつつ，一人ひとりが振り返る時間を設定し，具体的な方策等を明確にするとともに，全教員で共有しましょう。

次につなげる